小川未明文学館 館報 第九号

vol.9

2015年5月31日

ミュージアムグッズ　ポストカード（5枚セット）

『犬と犬と人の話』湯川弘文社（昭和11年1月 表紙絵 田村孝之助）、『ドラネコと鳥』岡村書店（昭和11年12月 表紙絵 池田永一治）、『気まぐれの人形師』七星社（大正12年3月 口絵 黒澤武之輔）、「月夜と眼鏡」（「赤い鳥」大正11年7月号 口絵 清水良雄）ほか

小川未明 文学館 館報 第九号

目次

【寄稿】
ねじめ正一
随想「父の貧乏に感謝」 2
【報告】
文学館一年の記録（平成二十六年度） 4
特別展
「高円寺の家 ―未明の暮らした街―」 6
文学館講座 9
【小川未明文学賞】 13
【ボランティアネットワークだより】
「のばら vol.11」 14
【文学館からのお知らせ】 16

小川未明文学館
新潟県上越市本城町八―三〇（高田図書館内）
TEL 025―523―1083
FAX 025―523―1086

随想「父の貧乏に感謝」

ねじめ 正一
（作家・詩人・小川未明文学賞最終選考委員）

小学校6年の夏休みの図画の課題が、町の絵を描くことだった。

町の絵ならば何でもよかった。公園を描いたり、風呂屋の煙突を描いたりする生徒もいたが、ウチの乾物屋を題材に描いた絵があった。

絵の真ん中には、下駄履きでエプロン掛けの太った母親がいて、まわりをかつお節や煮干しがこげ茶色、黒、灰色といった暗い色で塗りつぶされていた。その絵は、我が家の裏向かいにある大病院の息子のKが描いたものだった。それが特等で教室の壁に貼り出されているのを見たとき、私は思わず彼を殴ってしまった。

彼は悪意でもなんでもなく私の家の乾物屋を見たままに描いたのだろうが、私にはその絵が侮辱に思えたし、その絵を壁に貼り出した担任も許せなかった。

私は職員室に呼び出された。担任はどうしてKに暴力をふるったのかを聞いてきた。私は貝のように口を瞑った。

「何で殴ったんだ。Kと喧嘩でもしているのか。それにしても、突然殴るなんて、おまえ、卑怯だぞ」

卑怯と言われて、私は腹が立ったが、

「あの絵が好きじゃないからです」とだけ、やっとの思いで答えた。

「そんな理由だけでKを殴ったのか！Kに百回謝れ！分かったか！百回謝るんだぞ！」

絵が上手いとか、下手だとか、私には関係ない。私の家の乾物屋を描いてほしくないのだ。母親を描いてほしくないのだ。担任はKを殴ったから、すごい剣幕で怒っているのだ。担任の言葉が顔に降りかかるたびに、私は吐き気がしてきた。

その夜、私は父親に「なんで、僕は乾物屋なんかに生まれたんだよ。どうしてウチはこんなに貧乏なんだよ」と、がまんできずに文句を言ったら、父親は私の襟首を持って、背負い投げでおもいっきり投げられた。そして、

「オレは貧乏が自慢なんだ。二度と貧乏だと言うな！」と怒鳴ったのだ。訳の分からないことを言って、投げ飛ばされて、理不尽な父親に腹が立った。

乾物屋がイヤ、母親がイヤ、父親がイヤ、

この鬱屈したやり場のない気持ちを乗り越えるには、私には野球しかなかった。そして、私にとって「野球」は「長嶋茂雄」だった。寝ても覚めても長嶋茂雄で、長嶋茂雄に1ミリでも近づけるように、練習をした。

昭和30年代は、まだ町中にも空き地があって、私はボールが見えなくなるまで、野球をやった。当時は空き地には、「この土地には入るべからず」と立札がたち、必ず鉄条網が張ってあった。長嶋茂雄になりたい一心で、怪我にも臆せず野球をやったお蔭で、益々野球はうまくなった。

父が突然乾物屋をやめて、となり町で民芸店を開くことになった。

終戦直後、母と結婚して始めた乾物屋は、父の姉の夫、つまり父の義兄の持家を借りていたものなのだ。私が小学校6年の時に入っていた草野球チームに、その家の4歳年上の従兄も入っていた。子供ながらにも家と家の上下関係が分かっていて、従兄は私に対して権力風を吹かせるのだ。チームの中で私をいじめることで、自分の存在をチーム内で誇ろうとする威張ったイヤな奴だった。でも、Kのように殴ることはできない。親同士の利害関係が分かっているから。だが、とうとう我慢できず、チームをやめた。

父は私が従兄にいじめられて野球チームをやめたのを知っていて、私になにも言わなかった。ある日、その従兄が乾物屋にやって来て、気軽に父の肩を叩いた。

「この野郎、何だその態度は！馬鹿にするな」と怒鳴ると、従兄の襟首を持って、私の時と同じように一本背負いで投げ飛ばした。「あんな奴に負けるな。こんな家いつ出ていってもいいんだから」

私は父のこの言葉がうれしかった。「オレは貧乏が自慢なんだ」と私に怒鳴った言葉の意味が分かったような気がした。

父も甥っ子を投げ飛ばしてから、乾物屋をやめようと決心していたのだ。妻子がいて、大した蓄えもない商売替えは、生半可なことではなかったはずだ。ところが、幸いなことに隣町にある骨董品屋の家作を貸してもらえることになった。

父は若いころから骨董品が好きで、金もないのに、隣町にある骨董品屋に通い続けていた。その骨董品屋の主人が店を貸してくれることになったのだ。日が暮れると毎日飲みに出かけ、朝は起きず、店番は母に任せっきりのぐうたらな父だと思っていたのが、いざの時には、息子のために甥っ子を投げ飛ばし、親せきのしがらみをすっぱりと断ち切る父を、心の底から格好いいと思えた。今でも父の貧しさに感謝している。

◈文学館一年の記録◈

朗読研修会

5月20日・6月3日・6月17日
参加者　25名

橋 由貴さん（ヴォイスアーティスト・朗読療法士）を講師に、朗読研修会を開催しました。初めに、基本的な声の作り方や表現力の磨き方、基礎練習や発声練習方法とその大切さを学びました。その後、未明童話「島の暮れ方の話」「時計のない村」を題材に実践的な朗読を行い、個々に講師から指導を受けました。

童話創作講座

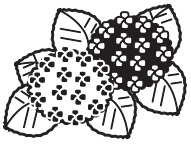
6月15日・7月27日・8月30日
参加者　12名

上越市在住の児童文学作家 杉 みき子さんを講師に、短編童話の書き方について学びました。まず、材料さがしや構成などについて基本的な講義を受け、その後創作した童話の講評を受けました。また、小・中学生3名を含む受講者同士でお互いの作品についてアドバイスしあい、今後の創作の参考となったようでした。受講者の皆さんの作品は、「童話創作講座受講者作品集」として、文学館の図書コーナーや図書館で読むことができます。

文学館講座

10月13日・11月9日・11月22日
参加者　43名

未明にちなんだ3回の講座を開催しました。講師は、第一回神林恒道さん「小川未明と「児童」文学」、第二回小埜裕二さん・宮川健郎さん「小埜裕二さんに聞く－『小川未明新収童話集』全6巻をめぐって－」、第三回小玉 武さん「小川未明と早稲田－二つのふるさと」でした。（詳しくは【報告】文学館講座の頁をご覧ください）



特別展（小川未明文学館）
「高円寺の家 －未明の暮らした街－」

11月22日～12月14日
来場者　1713名

平成26年度に未明遺族から寄託された資料のうち、未明の、父として、作家としての日常の生活が垣間見られるような資料を中心に、140点余を展示しました。（詳しくは【報告】特別展の頁をご覧ください）

会期中、特別展おはなし会を3回開催し、44名の方にご参加いただきました。

特別展（ミュゼ雪小町）
「未明童話を描いた7人の作家展」

11月29日～12月28日
来館者　3796名

安西水丸さん、いわさきちひろさん、牧野鈴子さんの「赤い蝋燭と人魚」、堀越千秋さんの「眠い町」、さいとうしずえさんの「月夜と眼鏡」、高野玲子さんの「牛女」、山福朱実さんの「砂漠の町とサフラン酒」－7人の画家それぞれが、独自の感性と画風によって描いた作品を同時に展示しました。あわせて、各時代の未明童話の挿画を、書籍や雑誌、絵本でご覧いただきました。

会期中、朗読コンサートと特別展おはなし会を開催し、おはなし会には70名の方にご参加いただきました。

朗読コンサート

11月29日
参加者　80名

ミュゼ雪小町で、橘 由貴さんが、翠川敬基さんの演奏する創作チェロ曲に合わせて、未明童話の「砂漠の町とサフラン酒」「月夜と眼鏡」「赤い蝋燭と人魚」の朗読を行いました。

第23回　小川未明文学賞贈呈式

3月28日

「小川未明の文学精神を次の世代に継承し、子どもたちの心に夢と希望を育む」ことを目的に平成4年から募集している第23回小川未明文学賞の贈呈式を、小川未明文学館で開催しました。大賞は宮崎貞夫さんの「ななこ姉ちゃんのふるさと」、優秀賞は別司芳子さんの「でこぼこ凸凹あいうえお」、井岡道子さんの「ママギャング」、うのはらかいさんの「天の網」でした。文学賞の頁で、大賞の宮崎さんの「受賞のひとこと」を紹介しています。また、贈呈式の前に、未明ボランティアネットワークによるおはなし会が行われ、27名の方にご参加いただきました。

文学館おはなし会

毎月第2・第4日曜日

未明童話の魅力を伝えるため、未明ボランティアネットワークの協力で、月2回のおはなし会を開催しています。26年度は24回で329名の皆さんにご参加いただきました。ボランティアの皆さんは、毎回すてきなポスターを作成し、文学館入口に掲示しています。そちらにもご注目ください。

出張おはなし会

未明作品に出会う機会をより多くの方に提供するため、未明ボランティアネットワークの協力で、出張おはなし会を開催しています。学校や放課後児童クラブなど、26年度は31カ所（1292名）を訪れました。

平成二十六年度特別展

高円寺の家
― 未明の暮らした街 ―

〈会期〉11月22日～12月14日
〈会場〉小川未明文学館

未明一家は昭和5年、杉並町高円寺に移り住みます。それまでは神楽坂や雑司ヶ谷など、にぎやかな下町で借家暮らしをしてきましたが、とうとう自分の家を持ったのでした。未明48歳のときのことです。

そのとき未明の息子たちは、次男14歳、三男9歳、四男4歳。下町の雑踏を好んだ未明でしたが、わんぱく盛りの彼らのために郊外への転居を決意したのかもしれません。未明の息子たちは、写生や魚釣りなどを楽しみ、武蔵野の大地でのびのびと育ちました。また、未明自身も「朝も昼も夕方も、自然木の杖一本を伴に歩きつくした」と語っているほど、杉並・中野の地が気に入ったようです。そのことは、高円寺に移るまでは住まいを転々としていた未明が、その後亡くなるまでの間に一度だけ、しかも同じ町内に引っ越しをしただけということからも伺い知ることができます。

平成26年、未明が晩年を暮した家が、老朽化のため惜しくも取り壊され、未明の書斎に大切に保管されていた品々が当館に寄託されました。

本展ではその中から、未明の日々の生活が垣間見えるものを中心に展示し、あわせて、未明が約30年を過ごした高円寺周辺の街の様子をご紹介し、未明の足跡をたどりました。

Ⅰ 未明のファッション

未明はどんな服装で、毎日を過ごしていたのでしょうか。高円寺の家には、晴れの日に着用した五つ紋付きの羽織、袴のほか、普段着も遺されていました。いずれも和服です。大正・昭和と、特に男性はどんどんと洋装化が進んでいきましたが、未明は生涯を和服で通しました。何十人もの人が写っている集合写真で、未明だけが和服姿ということも珍しくありません。

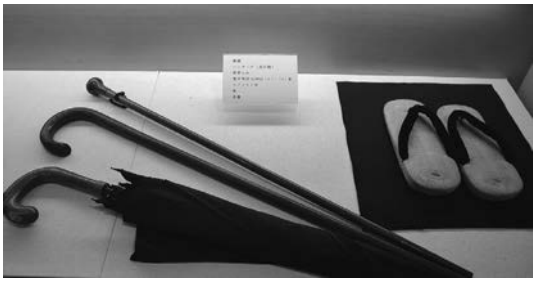
暑いときには単衣（ひとえ、裏地のない着物）、寒いときには袷（あわせ）の下にラクダシャツを着込み、上には羽織を着て、外出時にはとんびをはおりました。外出時には、ハンチングを被り、ステッキを携えました。

同じ高田出身の芥川賞作家小田嶽夫が高田に疎開し、戦後まだ東京に戻っていなかった時期のことです。中野駅近くの友人に会いに行った際、ばったり未明に出会いました。そのときのことを書いた文章があります。

向こうから未明が和服に鳥打帽という姿でやってきた。そのとき未明は六十四ぐらいの筈で、だがまだ十分若々しく、れいの大兵肥満のからだの背をまっすぐに立て、目は遠くの先へ向けているのだが、私はその姿を目にすると、ふと「ああ、世界的な童話作家がやって来る。」という感慨におそわれ、何か感動のようなものを覚えた。

―小田嶽夫「未明との出会い」

散歩に出かける未明



Ⅱ　未明の歩いた杉並・中野

未明は若いときから、午前に執筆をし、午後を散歩にあてていました。高円寺に越してきてからもそれは変わらず、ハンチングとステッキをお供に歩きまわりました。まだ自然が多く残るところを歩くのも好んだようですが、家からの最寄り駅である国電（現在のＪＲ中央線）中野駅周辺の床屋や本屋にもよく出かけていきました。夏の夕方には、家からほど近い、青梅街道を走る路面電車の山谷停留所付近に立つ夜店に、植木盆栽のひやかしに出かけるのが大きな楽しみのひとつでした。

模範大東京地図　昭和28年度版　昭和28年（1953）４月　日本地図

「昭和26年11月　中野駅南口広場工事完成」（中野区提供）

小さいころから絵を描くのが好きだった次男は、雨の日も毎日武蔵野の風景を写生しに出かけ、下駄がすり減って草履になるほどでした。元気な三男は学校から帰ると毎日近くの原っぱに遊びにでていました。

青梅街道を渡り、落語「堀の内」で有名な妙法寺の先にある和田堀まで釣りに出かけた息子たちの帰りが遅いと、未明は心配になって、ハンチングをかぶりステッキを持って街道を渡り、蚕糸試験所わきの道路まで迎えに出ました。子どもの頃小学校の先生から「無益な殺生をするものでない」と諭された未明は、釣った魚は弱らないうちに元の川に戻してくるように息子たちに言ったということです。

未明次女の岡上鈴江さんは、高円寺に引っ越してきた当時17歳。著書『父 小川未明』（新評論 昭和45年）や、『父未明とわたし』（樹心社 昭和57年）で、その頃の思い出を書き残しています。

帰りがおそくなったので叱られやしないかと、ひやひやしながらいそぎ足で歩いている弟の耳もとに友達が言った。「あ？あれ、きみんちのおじさんじゃないかい」

「はっとしてみると、道の向うにステッキを握りしめたおとうさんが仁王立ちにたっているんだ。あの大きな姿をみると、いつも『うえーっ、しまった』と思ったよ」

弟たちは、今でも口を揃えていう。

―『父 小川未明』

戦時中は、幸い家は無事だったものの、杉並・中野の一帯も空襲にさらされ、未明と妻も、次女夫妻と共に和田堀付近まで逃げました。コップ一杯の酒を求めて阿佐ヶ谷の国民酒場まで何度も歩いて通い、何時間も行列にならんだこともありました。

明治44年建設当時のまま遺されている蚕糸試験所正門

未明が息子たちを迎えに出た、蚕糸試験所わきの道路（現在）

Ⅲ　未明の暮らした家

都会の下町を愛し、19歳から約30年もの間、牛込・小石川を中心に転々と住まいを変えてきた未明。家を持つきっかけになったのは、まとまった収入があったことでした。大正15年から始まったいわゆる円本ブームで、未明にも予期せぬ印税が入ってきたのです。家を持つことに一番乗り気だったのは、妻キチだったようです。キチ夫人がさっそく探し求めたのが、高円寺の家でした。

大正12年の関東大震災以降、この辺りは下町から流入してくる人々で人口が増えたため、最寄り駅である中野駅も、未明が越してくる前年の昭和4年に移転改築されたばかりでした。

「昭和４年 中野駅南口風景」（中野区提供）

「最初の家」は、中野駅南口から妙法寺への新しい参道である堀ノ内新道を通り、田中稲荷神社の前の道を入ったすぐのところにありました。当時のようすを、鈴江さんはこう書いています。

そのころ、この辺りにはまだところどころに空地があって、青く茂った雑草の中を歩くと、足もとからびっくりした青ばったがとびはねて、かえってこっちがおどろかされたりした。家の裏のほうには葦がはえている沼地などもあって、時折り水鳥の姿なども見られた。

―『父 小川未明』

わたしの家の前を出た通りには小さなお稲荷さんがあった。赤いかわいい鳥居が何列かならんでいた。そして、この鳥居の前には赤い毛せんをしいた縁台をすえた茶屋もあった。

―『父未明とわたし』

田中稲荷神社（現在）

「最初の家」の隣にあるたばこ屋のご主人は、昭和6年、未明が越してきた翌年に生まれました。未明の四男とは一年間小学校が一緒でしたが、6歳離れていたため一緒に遊んだことはありませんでした。キチ夫人は未明の童話の本をくれたり、外で母親に叱られていると家から出てきて、「そんなに叱るものではないよ」とかばってくれたりしたそうです。

この家では、露台に趣味の盆栽をたくさん並べ、2階の二間のうち北向きの部屋を書斎にして、窓の下に机を置いていました。また、狭い庭に大きな庭石や木を入れたり、小さな池をつくったりして自然の趣を取り入れ、朝夕水を撒いては楽しみました。

「最初の家」で妻キチと盆栽を楽しむ未明（昭和26年）

二度の空襲にも焼け残ったこの家で、穏やかに暮らしていた未明でしたが、70歳の頃、庭の垣根の向こうの家の人が子どもたちに童謡を教えるようになり、ピアノの音と大きな歌声が、すぐそばの書斎で原稿を書く未明を悩ませました。そしてとうとう引っ越しを決意し、幸いすぐ近くに見つかった「晩年の家」に移ったのでした。昭和27年暮れのことです。

この家の庭にも池をつくったり石灯籠をおいたりして楽しみました。そしてやはり北向きに書斎をしつらえ、窓辺には趣味の骨董を置きました。もちろんそのかたわらには、常にたくさんの盆栽がありました。

「晩年の家」の玄関に立つ未明（昭和31年）

「晩年の家」（平成26年）

文学館講座

平成26年度文学館講座の要旨をご紹介します。

第一回
「小川未明と「児童」文学」

10月13日（月・祝）
神林 恒道氏
（にいがた文化の記憶館館長・大阪大学名誉教授）

私が未明について一言で評するならば、「天才」。そして大変運の良い人だと思います。例えば同じ天才でも、ゴッホが正当に評価されるまでには半世紀近くかかっていますが、未明は生前、童話作家として初めての文化功労者に選ばれている。大変幸せな人物ではなかったかと思っているわけです。

「赤い蝋燭と人魚」の挿絵を見ていくと、日本的なコスチュームと日本的な背景のもとで描かれている民話風なもの、どう見ても日本民話風ではないもの、様々なものがある。フラメンコにもなりましたね。つまり、未明の世界というのは、ある種の普遍性を持つと考えられる。しかもそれが文学というジャンルを超えてフラメンコまでに昇華してしまう。そういったところに、単なるお伽噺とか民話の世界にとどまらない未明の広がりというものを、我々は感じるべきではないかと思います。

イギリスのロマン派の詩人ワーズワースが書いた詩があります。訳すと「空にかかる虹を見る時、私の心は躍る。それは私の人生が始まったときからのことだ。大人になった今もそうだ。年老いてもそうであってほしい。さもなければ死んだほうがましだ！子どもは人類の父である。自然を敬いつつ人生の日々を送りたい」という内容です。未明も「自分は何時までも子供でありたい。たとへ子供でゐることが出来なくても、子供のやうに楽しい感情と、若やかな空想とをいつまでも持つてゐたい」と書いており、これはまさしくワーズワースの言っている言葉とぴったり重なります。

お伽噺とは、昔から語り継がれてきた物語をまとめたものです。ドイツのグリム兄弟などが有名ですが、その中には、実に残酷で恐ろしい話や、善が悪を打ち負かすというような決まりきった話がたくさんありました。そこで、子どもの純粋な心に話しかけるような物語、「童話」を書こうとした人が出てきました。それがデンマークのアンデルセンです。日本でも大正時代になると、「子どもは天使である」「童心には階級がない」という児童観が出てきた。それまでは、児童文学は概ね、未熟な人間である子どもを一人前の大人にするという、啓蒙的な教育観の元でつくられてきました。そうではなく、子どもの美しい心を育てるための歌や物語をつくろうという運動の中心になったのが、鈴木三重吉が始めた「赤い鳥」という雑誌です。それに、子どもと同じ目線で書かれている未明の童話がぴったりあったわけです。

いわゆる「さよなら未明」を提唱した一人である鳥越信は、「未明童話のテーマはすべてネガティヴなものであり、その内包するエネルギーがアクティヴな方向へ転化していかない点で児童文学として失格である」と言っていますが、なにも童話というのは明るく元気で前向きである必要はないと思いませんか。たとえば子どもの頃、夜、パチンと電気を消されて真っ暗闇の中に置かれた時。自分がこの暗闇、あるいは大きな宇宙の中に融けてしまった。そういう気持ちが未明の文学の中にはある。不可解な未知なるものへの怖れというのがそこにあるように思います。先程挿絵を見ましたが、「赤い蝋燭と人魚」は原文のままが一番いい、それぞれの心の中でイメージを持つべきで、挿絵もないほうがいいと私は思っています。もう一つ重要なことは、未明の文章の持っている魔力、美しさです。本来、詩とかおとぎ話は読むものでなく聴くものなんです。未明は、自分の物語を話して聞かせ、それを子どもが聞いて喜ぶ、そういったことを実感して物語を書いていたのではないかという気がします。

未明がある対談で語った、「とにかく天を畏れるとか、或は絶対者があるとかいふ、この気持が人間にない限りは、人間の行といふものは謙譲を欠くのみならず、優しさを欠いて来ますし、同情がなくなつて来ます。…自然の中に善を善とするといふ大きな力の存在することを知ることのみでも私はよいと思ひます。人間の知識だけでは分らぬ不可知な大きな知識が存在してをる」という言葉。大宇宙とか大自然、そういうものの中に見えざる力、ひとつの運命というものがあることを、彼は固く信じている。ドイツ・ロマン派の世界観に非常に近いところがあるのではないかと思います。

和紙に美しい絵の具をたらす、それがスーッと滲んでいく。未明のイマジネーションというのは、そういう水平志向の

ようなものがあるのではないかと思います。縦に組み立てるとかではなく、一滴の絵の具をたらす、それが滲んでいく、それを見て美しいなぁと思う。それで充分なのではないかと思います。それ以上でもそれ以下でもない。未明の思うところをあえて追求するならば、大宇宙の神秘とか、はかなきものに寄せる哀感とか、そういうところに帰着するのではないか。それとワーズワースの詩が、未明の最も眼目とするところであると思います。未明が「赤い鳥」と共鳴しあいながらつくった童話の世界があまりにもすばらしかったので、他の人はそれを超えることができず、未明のまねをしたわけです。それを若い世代が非常に歯がゆく思い、批判をした。つまり、未明は暗いからだめだ、前向きで旗を振って前へ進めと、そういうエネルギーを発散するようなものでなければ子どもに見せちゃだめだと、過保護にした。しかし、おもしろいかおもしろくないかは、読者である子どもが判断しなければいけない。未明が子どもの目で書いているのだから、一番正しい判断ができるのは子どもなんです。大人のいらざるおせっかいで「さよなら未明」と言ってしまった。もう一度、未明を呼び返す必要があるだろうと思うし、それが本来の童話の本道というものだろうと思います。

第二回
「小埜裕二さんに聞く―『小川未明新収童話集』全6巻をめぐって―」

11月9日（日）

小埜 裕二氏（上越教育大学教授）
宮川 健郎氏（武蔵野大学教授）

小埜：『小川未明新収童話集』全6巻（日外アソシエーツ 平成26年1月～3月）の出版によって、講談社の『定本小川未明童話全集』に入っていない作品を、皆さんに読んでいただく機会を提供できたのは何よりだと思っています。最初は『解説小川未明童話集45』（北越出版 平成24年3月）をつくりました。未明の童話集は150冊くらいありますが、その中から未明童話の特徴をよく表す新収童話集を45冊選んで解説を複数人で書いたものです。この仕事を通して、全集に入っていない童話を活字にしたいという思いが芽生えてきました。『新選小川未明秀作童話50 ヒトリボッチノ少年』（蒼丘書林 平成24年3月）には、未明が故郷のことを書いた童話を多く収めました。また詩的で叙情的な童話も収めています。『新選小川未明秀作童話40 灯のついた町』（蒼丘書林 平成25年9月）は、全集の中で無視されてきた大人向けの童話、つまり小説と童話の中間くらいのものを集めた童話集です。この仕事と並行してつくったのが『人物書誌大系43 小川未明全童話』（日外アソシエーツ 平成24年12月）です。これは、この時点で存在が確認されている未明童話1200編ほどの書誌的な情報を示した本です。未明童話の半数程は発表された雑誌も年月もわからないものでしたが、この本の刊行にあわせて調査を進め、作品名・初出・あらすじ等を載せました。全集未収録の童話は、今までその数が分からず、分からないために、未明童話について発言することが躊躇されたところもありました。

最初に戻りますが『小川未明新収童話集』には、全集未収録の童話372編に新資料を加えて454編を収めました。底本の選定、童話の文字化、初出・底本一覧の提示、帯の言葉、表紙のカット、すべてに関わりながら本をつくっていきました。全集未収録童話を何度も読むなかで、全集未収録童話の価値が低いわけではないということに自信を深めました。454編という童話の数は、もう一人の童話作家が出現したと言ってよいくらいの数です。この新収童話集を通して、全集には十分収められることのなかった、初期の童話や戦争童話、幼年童話、カタカナ童話、ひらがな童話を読むことができるようになりました。それがこの童話集の意義だと思います。「明ではなく暗、動ではなく静、光ではなく闇、生ではなく死。その中に希望を求めた未明文学は今日の人々にこそ必要なものといえる」と解説文の中に書きました。未明童話はいっけん暗いのですが、そこには確かな希望の光があります。これは私たちに現在必要な光であろうと考えます。

宮川：主題と表現の両面から未明を批判した二人、古田足日氏と鳥越信氏が亡くなりました。この二人は少年期を長い戦争の時代に過ごし、敗戦でそれまで信じていたことを全部失ってしまったような世代です。戦後若い児童文学者としていろいろな議論をし、創作をするようになったとき、彼らは子どもの文学の中にも戦争や戦争を引き起こす社会を書かないわけにはいかなくなってしまった。未明のような詩的で象徴的な言葉では社会的な事件である戦争を書くことは難しいですから、未明を否定せざるをえなかったのです。実際戦後の児童文学は、散文的な言葉で子どもと社会の関係を書くも

のに転換していきました。現代児童文学の出発点である60、70年代は、子どもをめぐる問題は子ども達自身の力で必ず乗り越えられるという理想主義で書かれていました。ところが80年代になると理想主義が疑われて、子どもをめぐる問題は子ども達自身の力で乗り越えられるかどうかはわからない、となっていきます。現代児童文学をデザインした二人が亡くなって、ある時代が終わった、ある時代の外側に出てその時代を眺め返す立場になった気がしています。この時に小埜さんが新収童話集をまとめられた。今年は児童文学の歴史の中で大きな区切りの年になる予感がしています。現代児童文学は、読者の年齢層を上げていったことによって、だんだんと、子どもの文学ではないと批判されたはずの未明の方に近づいて来た。今回未明の全貌がほぼ見えてきて、ようやく未明というものを語れる場所に立った。未明批判から始まった現代児童文学の時代が、一旦ある終わりを見せたと言えると思います。「新収」とは、講談社の全集に収録されていないという意味ですが、この仕事を通して改めて全集をどうご覧になりましたか。

小埜：講談社の全集は、未明の作品が戦後人々に読まれる機会を提供した点で評価していますが、いくつかの問題点があります。まず、当時わかっていた全童話を収録することができなかった点。次に、少年少女が読むのに良いように、漢字を平仮名にひらき、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直している点。次に、編集者の意図により戦争期の童話や初期の童話が落とされている点です。

宮川：私がつくった『名作童話小川未明30選』（春陽堂 平成21年1月）という本では、定番中の定番を入れましたが、30編のうち25編が童話作家宣言前の大正期の童話でした。童話作家宣言の以前と以後の変化を、どんなふうにお考えですか。

小埜：未明の作品は童話だけで1200編、小説が600編、随筆・小品・評論類が1500編、詩が100編くらいあります。将来は全作品を収めた全集をつくることが必要です。そのうえで大正期と昭和期の変化を考えていくことが必要です。子どもたちが読む未明の童話集はいろいろあってよいと思います。定番の童話が30編くらい入ったものをいくつか手に取ることができたり、また未明の別の顔を示す童話集を読むことができたりするような。150冊ほどある未明童話集の中で、どの童話が何度収録されたかをカウントしたことがありますが、そこの計算でも上位に入ってくるのはやはり大正期の童話なんです。未明が小説を書いたり、社会運動をしたり、まさに多面的な仕事をしていた時に書かれた童話が今もっともよく読まれています。未明は、愛と正義をテーマにしています。童心というのもキーワードです。童話集『金の輪』のあとがきの中で、未明は次のように言っています。これらの童話はまず大人に読んでもらいたい、しかし勘のいい子どもは私の書いた作品を理解してくれるだろうと。ところが昭和になると未明は童話だけを書きました。幼年向け、少年向け、少女向け、大人向け、すべての方面の読者を満足させる童話を書き分けました。その自信があったので、未明は童話作家宣言をして小説の筆を折ったのではないでしょうか。

宮川：童話作家宣言には「童話と小説を書き分ける苦しさを感じて来ました」とありますが、未明の中で小説の童話化、童話の小説化というものが起こり、二つが一緒になった上でそれを童話と呼んだのだなということが見えてきたと思います。

第三回
「小川未明と早稲田 ―二つのふるさと」

11月22日（土）

小玉 武氏

（小川未明文学賞委員会会長）

■高田と早稲田

小川未明（明治15～昭和36）の作品の原風景になるものはなにか、その作品の誕生の秘密をたどってみたいと思います。未明は祖母から昔話や謡曲などを聞かせてもらい、耳で日本語のリズムをおぼえ、物語のリズムというものをしっかりと体に入れた。精神的に豊かな幼少期を送ったのではないかと思います。

高田中学への通学途中に触れた自然、時に応じて目に映る風景に対する感受性、そういうことを非常によく覚えていると未明は文章で何回も書いています。それだけ自分の生まれ育ったふるさとについて特別な思いを持ち続けて、創作の原点、モティーフにしていた印象があります。高田中学では、漢詩など文学に目覚め、数学を嫌った。官僚的な教育に反発し、ついには上京の志を抱くようになります。

そして上京してすぐ上野駅頭で会った中学の同窓の先輩に勧められ、東京専門学校を受験し合格します。翌明治35年、東京専門学校は早稲田大学になります。未明は大学で相馬御風、吉江喬松などの友人を持ち、坪内逍遙に目をかけられ、

その読書会に出席するようになります。そこで未明は島村抱月ら、たくさんの人に出会うわけです。「未明」という筆名は逍遥がつけてくれたものです。「びめい」だった読みが「みめい」と呼ばれるようになりました。

■小泉八雲に心酔！

さらに未明にとって幸運だったのは、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン、嘉永3～明治37）が早稲田で教えるようになったことです。しかし残念ながら小泉八雲は早稲田に来た年の9月に心臓麻痺で亡くなってしまいます。

実質早稲田で講義したのは4ヶ月か5ヶ月。しかしその短い時間の講義が、学生に感動を与えている。未明は「八雲先生の講義を聞いた。うっとりするような講義だった。自分は半分しかわからなかったけれども、すばらしい講義だった。だんだん月日が経ってくるとその講義が胸に響く」というようなことを書いています。未明の卒業論文は「ラフカディオ・ハーンを論ず」でした。私たちは未明の作品の中に、八雲の影響を発見する事ができます。八雲は非常に激しい感情と、鋭い神経の持ち主だった。ものを美しく見る空想の持ち主であった。耽美的で象徴的な表現をする。私は八雲を読んでいてそういう印象を受けます。それが未明に乗り移ってきているのではないかと思うのです。

未明は八雲から何を学んだのか、私なりの考えを4つあげてみました。1．『怪談』を読み、その民話的な要素、リズミカルな言葉の流れといったものを感じ取った。2．八雲のロマン主義的な詩精神と、さらに寓話的な素材を創作に持ち込む手法を学んだ。3．八雲全集を読んで、創作方法、創造力、素材の入手方法を学んだ。後年次女の鈴江に、八雲の『詩論』と『詩人論』を与えたことから、八雲を文学の基本としたことが伺える。4．最初の創作集『愁人』に、「面影－ハーン先生の一周忌」や小品「浄土」、短篇小説「ひまわり」で八雲を追想している。スタートの時点で八雲の影響を受け、学んだ。それは最後まで続くわけです。

■「早稲田文学」で活躍

未明は22歳で「霰に霙」を書いて文壇デビューし、明治38年大学卒業、「早稲田文学」にも作品をたくさん発表します。明治39年から昭和2年まで続いた、島村抱月が主宰をしていた第2次「早稲田文学」で未明はたいへん活躍し、それが未明の活躍の最初の表舞台でした。未明はさらに「新小説」などいろいろな一流雑誌に原稿を書きつづけて、多くの作品を残し、明治・大正の代表的な文学者の一人に数えられる。童話作家小川未明なのだけれど、小説家としても一家をなしていたわけです。

未明の短篇集『物言わぬ顔』の序文に、「陰気な森や恐ろしい疫病や人の死ぬ前に来る凶兆やそれらのものをもじっと見つめて芸術の対象として、この災いの暗い森の中にも空想の美しき、ともしびを灯したい」と書いてあります。単に美しいものだけではなくて、不幸なつらい、あるいは悪であるとか善であるものを離れた次元での人生の追求、そういうものを未明は目指したのではないかと思います。

未明には、批判と評価が両方あります。批判は、鳥越信ら、60年安保の前後にかけてあった、伝統的な童話を否定する動きの中で起こりました。一方、逍遥、相馬御風を始めとして、近年では山室静や紅野敏郎、西本鶏介らが未明を高く評価しています。紅野敏郎の言葉で、「ずれと揺れ」。評価や批判がまだ固まっていない所があるところに、未明の魅力がある。

■上越が誇る児童文学賞

先程ボランティアの皆さんの朗読を聞かせていただきましたが、未明の作品は声に出して読むとすばらしいですね。未明の作品の文章の末に、「～であります」という言葉がよく出てきますが、あれを朗読で聞かせてもらうと、すばらしくリズミカルに聞こえます。「あります」という言葉でリズムを取って、子どもにとっては強い印象が残る。未明文学にはいろいろ工夫がみられ、そこが魅力的なところです。

そしてこれからは、小川未明文学賞や坪田譲治文学賞（坪田譲治は早大で未明の後輩）の受賞者に活躍してもらいたいと期待しています。受賞者たちは、みんなどこかで未明に繋がっている。小川未明文学賞も短篇の募集が始まりましたので、中学生から80代までどんどん応募していただきたいですね。嬉しいことに、近年、児童文学に大人の読者の関心が集まっています。江國香織や重松清らの活躍も目立ちます。今回は未明文学のさわりだけお話させていただきました。

小川未明文学賞

小川未明文学賞は、日本児童文学の父といわれる上越市出身の小川未明の文学精神「人間愛と正義感」を次代に継承するため、平成4年に創設されました。子どもたちの心に夢と希望を育むような鮮烈な児童文学作品を募集しています。

平成26年度で第23回目を迎え、これまでに延べ10，000編を越える作品が国内外から寄せられました。

大賞作品は単行本で刊行され、多くの子どもたちに読まれています。

小川未明文学賞贈呈式

第24回募集要項

◆**募集作品**

①部門（小学校低学年向け）…400字詰め原稿用紙20枚～30枚

②部門（小学校中学年以上向け）…400字詰め原稿用紙60枚～120枚

・いずれも小学生を読者対象とした創作児童文学で未発表の作品。各部門同時応募も可。

・A4サイズで縦書き。ワープロ等の場合は400字詰め換算枚数を明記。

・表紙に題名、筆名、本名（ふりがな）、年齢、職業、性別、〒住所、電話番号を明記。

・原稿用紙2枚程度のあらすじを表紙の下に綴じる。

◆**応募資格**

不問

◆**応募方法**

上越市文化振興課へ郵送または持参

◆**締切**

平成27年10月30日（金）（当日消印有効）

◆**入選作**

・大　賞1作（賞金100万円・記念品）

・優秀賞3作（賞金20万円）

◆**発表**

平成28年3月上旬（予定）

＊詳細は小川未明文学館ホームページをご覧いただくか、左記にお問い合わせください。

応募・お問い合わせ先

〒943-0832　新潟県上越市本町3-3-2

上越市文化振興課

「小川未明文学賞担当」

TEL　025-526-6903

FAX　025-526-6904

E-mail　mimei@city.joetsu.lg.jp

＊受賞のひとこと＊

このたびは小川未明の名を冠した由緒ある文学賞をいただき、喜びでいっぱいです。

私には、幼い頃、秋祭りの間だけ村にやってきて集会所に寝泊まりし、祭りが終わるとどこかに帰っていく、見知らぬ女の人になぜかとても可愛がられた記憶があります。当時その人は十七、八歳くらいだったでしょうか。身なりも貧しそうで、村にはその人を物貰いだという人もいました。村にきても、その人には血縁者も友達もいないらしく、私を連れてお宮に行ったり、川原で石を拾ってくれたりするだけでしたが、身近に姉のような人がいなかった私は、親に隠れてその人に連れられているのが、とても心地よかったのを覚えています。遊んでもらったのは二年ほどで、その後はその人を見かけなくなりましたが、いま思うと、何か事情があって疎遠になっているものの、村がその人のふるさとだったのかもしれません。この作品は、こうした八十年も前の甘酸っぱい記憶を辿り、舞台を五十年ぶりに舞い戻った自らのふるさとに設定し、当時のその人と私を、それぞれ主人公のななこと翔太に置き換えて描いたものです。

しかし、書き始めてみると、年上のななこと幼い主人公ふたりが、五年の歳月を経て兄弟のように緊密な関係になっていくという過程の記述が難しく、何度書いてもうまく描けません。しかも、作品の舞台は、伝統のある太鼓祭りから地名まですべて実名、選考で予選落ちしたら――故郷に舞い戻ったばかりの、半ばよそ者の私が――作品もろとも、ふるさとまで巻き添えにするのではないかとの、たわけた妄想までチラチラし、このまま応募してよいものかどうかと何度も思案しました。そんな折り、ある作家の方に作品に目を通していただく機会があり、「この作品は思いのこもった力強い作品であり、堂々と小川未明文学賞に応募できるものです。どうか最後まで仕上げて、選考委員の先生方の目に触れさせてください」と力強く背中を押していただきました。こうした励ましをいただき、やっとのことで応募にこぎつけた本作品が念願の大賞に選ばれたことは、本当に幸運であり有り難いことだと思っております。

最後に、懇切に対応してくださった文化振興課の皆様、文学賞委員会の皆様。また最終選考で本作品を推してくださった先生方。さらには予選で本作品をすくい上げてくださった皆様、心より感謝申し上げます。

第23回小川未明文学賞大賞受賞　宮崎　貞夫

（大賞作品「ななこ姉ちゃんのふるさと」）

平成26年度の活動

- 小川未明文学館ビックブックシアターおはなし会…全24回、延べ参加者329名
- 出張おはなし会（小学校、放課後児童クラブ等））…31ケ所、1,292名
- 特別展おはなし会（小川未明文学館・ミュゼ雪小町）
- 会員の研修会

特別展 おはなし会

今年は特別展が２会場で行われました。それに合わせて特別展のおはなし会もビックブックシアターとミュゼ雪小町で開きました。

第１会場：小川未明文学館ビックブックシアター

- ➢11月９日（日）「くもとかきの葉」、「お母さんのひきがえる」　グループさくら
- ➢11月22日（土）「砂漠の町とサフラン酒」　お話の会うさぎ
- ➢11月23日（日）「三匹のあり」、「赤いちょうちんの話」　グループ空

第２会場：ミュゼ雪小町

- ➢12月７日（日）「牛女」、「赤いろうそくと人魚」　未明童話の会

（お話の会うさぎ）
ビックブックシアターでは「砂漠の町とサフラン酒」を朗読しました。文学館講座もあり、大勢の方に鑑賞してもらいました。

（未明童話の会）
ミュゼ雪小町では「赤いろうそくと人魚」「牛女」を朗読しました。小学生の子どもも、尺八の生演奏に合わせての朗読をとても熱心に聞いてくれました。

新グループ紹介「シャーフの会」

平成26年度の朗読研修会に参加したうちの４名で結成しました。今年は羊年ということで、ドイツ語で羊をあらわす「シャーフ」をグループ名にして活動していきたいと思います。精一杯がんばります。６月14日（日）に、文学館おはなし会でデビューする予定です。よろしくお願いします。

小川未明文学賞贈呈式

（お話の会うさぎ）
贈呈式の前に「きつねのおばさん」「野ばら」を朗読しました。

出張おはなし会、会員加入の連絡先
上越市文化振興課
〒943-0832 上越市本町３－３－２
TEL 025－526－6903
FAX 025－526－6904
E-mail：mimei@city.joetsu.lg.jp

のばら

未明ボランティアネットワークだより

vol.11

発　行：未明ボランティアネットワーク
発行日：2015年 5 月31日

出張おはなし会　おもに小学校と放課後児童クラブへ出かけました

大和小学校放課後児童クラブ　（グループさくら）
「野ばら」「月とあざらし」「ねずみとバケツの話」をしました。しっかり理解してもらえてうれしいです。

三和放課後児童クラブ　（グループ空）
「ある男と牛の話」「三匹のあり」「月夜と眼鏡」をしました。いつまでも心に残ってくれるとうれしいです。

中保倉小学校　（未明童話の会）
「月夜と眼鏡」「赤いろうそくと人魚」をしました。温かい雰囲気のおはなし会でした。

諏訪小学校　（お話の会うさぎ）
「もっと、小川未明のお話を読んでみたくなりました」と感想を寄せてくれました。

文学館おはなし会　（毎月第 2、4 日曜に実施）

（グループ空）
あり達を動かす作品を作りました。子ども達は興味深く絵を見ながらおはなしを聞いてくれました。

（グループさくら）
「山の上の木と雲の話」をパネルシアターでしました。子ども達にパネルに張り付ける体験をしてもらい、一層おはなしに関心を持ってもらえました。

● お知らせ ●

小川未明関係資料の収集について ご協力のお願い

小川未明文学館では、未明に関係する文学資料の収集に努めています。下記の資料に関する情報をお持ちの方は、ご連絡くださいますようお願いします。資料の寄贈については、特定の場合（すでに複数点を所蔵している資料等）を除きお受けしますので、ご不明の点はお問合せいただけると幸いです。

【主な収集資料】

1．特別資料

小川未明原稿、書簡、遺品、その他自筆資料（短冊・書軸等）、写真（オリジナル）、小川未明関係者資料（未明書簡、献本など）

2．図書

未明作品集（未明生前・没後刊行図書）、全集・選集（未明作品を一部所収した資料も含む）、初出雑誌（未明作品掲載）、未明作品の外国語訳、絵本・紙芝居

3．参考資料

未明に関する研究論文、エッセイ、記事（雑誌・新聞等）

平成27年度　小川未明文学館カレンダー

6～7月　朗読研修会
　6月26日(金)・7月10日(金)・7月24日(金)

7～9月　童話創作講座
　7月26日(日)・8月30日(日)・9月6日(日)

10～11月　開館10周年記念特別展
「移動する未明―高田・早稲田・高円寺―」
＊各種イベントを開催

10月　小川未明文学賞締切　30日(金)

11月　小川未明フォーラム　8日(日)

11～12月　文学館講座
　11月7日(土)・11月21日(土)・12月6日(日)

3月　小川未明文学賞贈呈式

＊通年で、所蔵品紹介の小展示を行っています

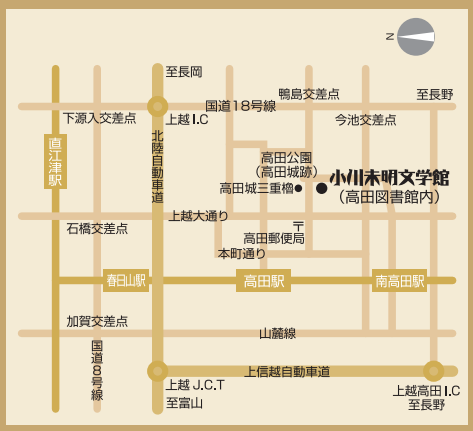
未明ボランティアネットワークによるおはなし会
＊毎月第2・4日曜日午後2時から文学館にて開催
＊学校等での出張おはなし会を随時開催

小川未明文学館のご利用案内

開館時間
火～金曜日　午前10時から午後7時
（6月から9月の間は午後8時まで）
土・日・休日　午前10時から午後6時

休館日
毎週月曜日（この日が休日の場合はその翌日）
休日の翌日・館内整理日・資料整理期間
年末年始（12／29～1／3）

入館料　無料



お問合せ
〒943-0835
新潟県上越市本城町8-30（高田図書館内）
TEL　025-523-1083
FAX　025-523-1086
URL　http://www.city.joetsu.niigata.jp/

発行　上越市文化振興課　〒943-0832 上越市本町3－3－2
ＴＥＬ：025－526－6903　ＦＡＸ：025－526－6904